

*Building Dignity*

Japan Adventist Academy

三育学院中等教育学校

『 損な立場がとれた時 』

今年の2月に亡くなられた作家の曾野綾子さんが、「自分をまげない勇気と信念のことば」という本の中にこんな言葉を残しておられました。「権利を主張することが民主的な生き方であって、それが人間の最も望ましい生き方だなどと、私は思えない。私自身、弱いエゴイストだけれど、人間というものは、自分が損のできる人にならなければならないと思っている。できるかどうかは別として、そうありたいと願うのである。損な立場がとれた時、人間は初めて、動物ではなく、人間になれるからなのだ。」



40 代の頃にこれを初めて読んだ時の私の感想は、確かに人間と動物の違いはそういった所にあるのかもしれないが、本当に人間が自分の損となる立場を敢えて選び取るなどできるのだろうかという疑問でした。そして、それからというもの、この問いは私の頭から離れませんでした。「本当にお前が人間らしいというのならば、自分が損する立場を選び取るんだろ?」「あの時のあの選択は、何か人には分からないが、自分だけが知っている得を手に入れるためにうまく進めたのではなかったのか?」などという声が聞こえてくるように感じることもあるのです。情けないことですが、今でも、自分はまだまだだと反省することが多いというのが現状です。

しかし、聖書には、この「損な立場をとる」という思想が、いたるところに流れています。いくつか例を挙げてみましょう。

「何事も利己的な思いや虚栄からするのではなく、へりくだって、互いに人を自分よりすぐれた者と思いなさい。」ピリピ 2:3

「あなたの右の頬を打つ者には、左の頬も向けなさい。」マタイ 5:39

「あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、皆に仕える者になりなさい。」マルコ 10:43

「どうして、むしろ不正な行いを甘んじて受けないのですか。どうして、むしろ、だまし取られるままでいいのですか。」Ⅰコリント 6:7

「愛は... 自分の利益を求めず、苛立たず、人がした悪を心に留めず、」Ⅰコリント 13:4~5

このように、聖書は基本的な姿勢として、・権利を守るより、損を担う勇気、・強さよりも、弱さを選ぶ愛、・自己主張より、他者に仕える心、・自分を低くする者が、最も尊い、といったような、一般社会的には、価値逆転と思われる価値観が多く含まれています。「損な立場がとれた時、人間は初めて、人間になれる」という曾野綾子の言葉は、彼女がキリスト者であったことと深く響き合っているように感じますし、イエス様の誕生物語こそがそれを表しています。 校長 尾上 史郎

マリアは月が満ちて、男子の初子を産んだ。そして、その子を布にくるんで飼葉桶に寝かせた。

宿屋には彼らのいる場所がなかったからである。

ルカによる福音書 2 章 6~7 節



*Building Dignity*

Japan Adventist Academy

三育学院中等教育学校

『問題盲』

少し前に「上流思考 (UPSTREAM)」(デューク大学ビジネススクールシニアフェロー DAN HEATH 著) という本を読みました。とても参考になる内容でしたが、この書籍名は、誤解を生むものかもしれないと思いました。ここでいう「上流思考」というのは、問題を解決するためには、何かが起こったときにそれに対処するのではなく、そのもっと上流に注目して本質的な所に手を付けられない限り、本当の解決には至らないという趣旨で書かれていたからです。



6 年生の卒業記念制作間もなく完成

実例として、シカゴ学区の公立高校での卒業率が 1998 年には 52.4% しかなかったものが、2008 年から新たな取り組みで、卒業率が 2018 年には 78% に向上したということが取り上げられていました。最初の 10 年間には、誰もがシカゴ学区では、そういうものだとも誰も疑問を持っていなかったというのです。このような状態を「問題盲」の状態と言います。この地区の住民の経済状況では仕方がないとか、貧困家庭では、勉強不足は、どうしようもないといった何をやっても無理だろうという思いになってしまい、問題を問題として捉えようとしない「問題盲」という状態に陥っていたというのです。ところが、ある研究チームが、生徒が高校 1 年目を終えた時点で、卒業するか中退するかを 80% の精度で予測できるという発見を発表しました。それは、拍子抜けするほど単純な 2 つの要因でした。「通年科目を 5 単位取得していること」と「数学・国語などの主要科目の単位を 2 学期以上落としていないこと」でした。そこで、この指標をもとに高校 1 年時の指導に力を入れた取り組みを始めたところ、次の 10 年で卒業率は、25 ポイントも跳ね上がることに繋がったということでした。これは、目の前にある問題のさらに上流を見るようにすることによって色々な問題を予防することにもつながるという良い実例だと感じました。

私たちの学校の中に、家族の中に、教会の中に、この「問題盲」は、ないでしょうか。また、目の前の仕事に集中して続けなくてはという思いで頭がいっぱいになり、広い視野から物事を見ることができずに見落としてしまっているという現象（これを「非注意盲」といいます）に陥ってしまっているということも私たちが陥りやすい状態かもしれません。

私たちの日常生活の中では、問題が常態化すると見えなくなってしまうものです。新しく加わった人たちの意見、組織の外から見た際に感じた声、それらに「仕方がない」「そんなもんだ」という姿勢で対応してはいないでしょうか。これは私たちの家庭の中でも起こりうる事かもしれません。

三育の学校が「この問題を生み出したのは私ではない。でも、それを解決するのは私だ。」と言える者の集まりでありたいと思います。

校長 尾上 史郎

「わたしを呼べ。わたしはあなたに答え、あなたの知らない隠された大いなることを告げ知らせる。」

エレミヤ 33:3

